

第1回あゆみ研修会 講演に関するQ&A



講演後、参加者からいただいた質問事項に対して、講師の前島様からいただいた回答を紹介します。

Q1 ・デンソーブラッサムで働いている方が中、高とどのようところで学んでいたのか知りたいです。特別支援学校、支援学級、高等特別支援学校、専修学校など。

A 新卒採用のメンバーはすべて特別支援学校からの採用になっています。中学校までは地元の学校の支援級、という方も一定数いますが、やはり高等教育になるとついていけない、または小中と違い、本人に適した配慮が受けられにくいといった理由で高校から支援学校へ編入するというパターンが多いと思います。ただブラッサムとして支援学校しか採用しないということではなく、希望される方がおられれば一般の高等学校や専修学校といったところからの応募にも対応させていただいております。採用実績はないものの、実際に高等学校からの問い合わせや実習への応募もありました。中途採用の方の多くは卒業後、就労移行支援事業所に通われている方ですが、その中には一般校～大学という経歴の方もお見えです。また高校卒業後～障害者職業訓練校という方もお見えです。

Q2 ・見学は小学生+保護者（希望者）でも行けますか？

A 見学者に年齢制限はないので小学生でも見学はできます。ただし、働く場を見に行くという目的意識がない状態で現場を見ても、あまり意味のない見学になる可能性がありますので、その辺は考慮したうえで見学を検討いただきたいと思います。過去の例を見ても目的意識を持って見学できる中高生くらいからが妥当だとは思っています。また大変広い敷地内を案内しますので、落ち着いて行動することが得意でない生徒さんの場合は保護者様や引率の先生方にしっかり対応いただくことはお願いしています。（ブラッサムスタッフは見学対応でご案内等はしますが見学者の支援までは致しかねます。）



Q3 ・個別の支援計画に記入されていて、とても有用だと感じた情報は何でしょうか。

A 講演でお伝えした通り、できること、できないことはわかっていることは企業としては大変重要だと思います。また、できないことであっても「+α」があればできるという情報も支援を検討する際に参考になります。例：集中は30分までしか続かないが間に5分の休憩を挟めばまた30分集中できます、等。またネガティブな情報（自傷やパニック、いわゆる反社会的行動）を教えていただけないケースが時々あります。採用に不利な情報を伝えることに抵抗はあるかもしれませんが、採用後にわかったとなると企業・本人・学校の信頼関係が崩れ、結果的に良くない影響しかありません。不都合であってもありのままの情報を提供いただくことで当社としても、パニックを起こさないためにはどういった支援が必要か、パニックを起こした時を想定して落ち着ける環境の確保をしておくなど、対応検討に生かすことができます。できる限りで正確でありのままの情報を頂ければと思います。



Q4 ・特別支援学級の教師です。支援学校ではない支援学級に通っている子に期待することはありますか？

A 個人的に支援学校、支援学級という立場の違いで期待することが変わることはありません。ただ人格形成に必要な多様な体験は将来の生活を見据えて早期から始める方がより成果となって現れます。そういった意味では就職はまだ先の話、と思わず、将来を見据えた活動に取り組んでいただくことを期待します。また、おとなしく問題もなく、周囲に合わせられるような生徒さんの場合、今現在、特に問題がないから、という理由で現状維持のまま来てしまうケースがあります。そういった生徒さんにこそ将来の就業や生活に向けた成長のための支援が必要です。今日の前の課題だけで支援の必要性を判断せず、将来的な必要性をもって教育や支援をしていただければと思います。

Q5 ・将来のために磨くべき力を磨くために小学部のうちに具体的にどのような支援をしていくと良いのでしょうか。

A まずは一人ひとりの生徒さんの将来像を先生やご家族、支援機関の皆さんで想像する必要があります。前回お話した通り、将来どのような働き方、暮らし方を希望するかによって今から何をすべきかは変わります。まずは生徒さんのライフプランを想像し、そのために必要な取り組みは何か考えることでしょうか。必要な取り組みがわからないときは地域の障がい者相談員さんや福祉事業所の職員などにも一緒に考えてもらえばよいと思います。



Q6 ・何となく係活動をしている、朝学習をしている、ということもなくしたいです。やりがいを感じられるよう喜びを感じられるようにするには、どうしたらよいのでしょうか。

A 学校での係や当番、家庭でのお手伝いなど役割を持たせることは大変重要だと思います。ただおっしゃる通り、いつしかやること自体（方法）が目的になってしまい、本来の目的が見えないまま「ただやっている」という状況に陥ることも少なくありません。係活動や家庭でのお手伝いなどの本来の目的は「人の役に立っている」「誰かに必要とされている」「誰かに感謝される」経験を通じて【自分は必要とされている人間なのだ】という自己肯定感をはぐむため、だと思っています。従って活動を通じて係をしている生徒さんが「頑張りを評価されている」、「誰かの役にたっている」と実感できる仕組みが必要です。係なんだからやって当たり前、家族として家のことを手伝うのは当たり前、とおっしゃるかもしれませんがそれは障がいを持つ生徒さんには正しいメッセージとしては伝わりません。まずは係の生徒さんが「頑張ったことが報われた」、「誰かの役立つことがうれしいことなんだ」という体験をさせてあげることだと思います。そういった経験値を持つ方は相手を気遣う力やチームワークを大切にできる大人へと成長します。どの職場もきっと必要とされ結果として長く働くことができると思います。

